

永井路子

氷輪

上



氷 輪

上

永井路子



中央公論社

氷
輪
上

定価二二〇円

昭和五十六年十一月十五日印刷
昭和五十六年十一月二十五日発行

著 者 永井路子

発行者 高梨 茂

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替東京二一三四

●一九八一

水
輪

上

目
次

演 出	葬 送 行	儀 式	言 葉	時 間	出 発
--------	-------------	--------	--------	--------	--------

137	113	91	59	37	7
-----	-----	----	----	----	---

唐 律 招 提	遺 構	空 白	優 詔	杖 死
------------------	--------	--------	--------	--------

257	231	207	181	159
-----	-----	-----	-----	-----

装帧・插画
生
沢
朗

氷

輪

上

出 発

旅装をととのえた僧形が二人、奈良の西の京を馬の背に揺られてゆく。七六一年——天平宝字五年の初夏のことである。

供は数人、支度は簡素だが、かりそめの旅ではないらしく、秋篠川ぞいの道を北に辿りながら、時々後をふりかえる。風になぶられて青いゆらめきをくりかえす森の向うには薬師寺の塔ものぞいているのだが、彼らの視線は、わずかにそこからは外れていた。

何度かふりかえった後、先に立った体格のいい青年僧は、やっと思いきりをつけたように馬の歩みを早めた。厚みのある胸を反らせて軽く眼をつむっているのは、今しがたまで見ていた風景を眼裏に刻みつけようとしてであろうか。

ややあって、眼は開かれた。

翡翠いろの瞳であった。鼻梁高く、肌もこの国の人には似ず、白瑇瑤の光沢つやを含んでいる。一月余り後、この碧眼の僧の姿は、東国の野に見出されるはずである。

千二百年も前の、ほとんど荒蕪に近い東国の平野に碧眼の僧をおいてみるのは唐突の趣きがあるが、しかし彼はいたずらにこの地をさまよい歩いていたわけではない。彼とその同行者——彼もまた唐からの渡来僧だった——がめざしたのは下野国薬師寺、この大寺に授戒のための戒壇を建てるのがその任務であった。そしてこの大役を命じられたのは、ひとえに彼らが中国から波濤をこえて来日した戒和上鑑真の弟子であることによる。

碧眼の青年僧は如宝、先輩格の唐僧は惠雲、しかし筆者は、はるばる東国に足跡を印した碧眼僧の運命の数奇について語ろうとしているのではない。彼に関して残る史料はきわめて少ないのだ。もちろん歴史の中に見えかくれする彼の姿を追って虚構を組みたてることは可能だし、筆者自身その誘惑に駆られる思いもあるが、ここでは、あえてそれを避けようと思う。史料から彼の姿が消えても深追いはすまい。彼が視界から遠ざかったとき、代ってあらわれるのは八世紀後半の日本の、華麗にして冷酷、矛盾にみちた天平文化の世界である。が、史料から姿をかくしたとしても、依然如宝はその中に生きつづける。そして、端嚴な伝戒の師、鑑真も……。

つけ加えておくと、この世界を史料にフォローしながら発掘してゆくのは、猿轡をはめられたような窮屈な作業では決してない。これまで自明のこととされていている事実疑問を持ち、もう一度謎を解きなおしてみると、新しい何かが浮かび上ってくるに違いないからだ。

たとえば、如宝の来日は七五三年（天平勝宝五年）だが、これまで八十四歳と考えられている没

年から割りだすと、このとき彼は二十二歳ということになる。しかし、これにはいささか疑問がある。師に従って日本の土を踏んだ一門のうちで一番年若の彼は、そのころまだ優婆塞——俗体の仏教者だった。そのことから推して、当時の中国の仏教界の常識では二十歳とされている受戒の年齢以前と見た方がいいのではないか。私見ではまず、十八歳というところである。

このことにはまた触れる折もあるうが、ともかく、この若者はすすんで師について来た。

——よくもあの波濤を越えて……。

という気もするが、案外如宝自身には、悲壮な決意はなかったのではないか。もともと彼の住んでいた揚州は港町で、当時の国際都市だった。ペルシャ、インドあるいは中国南部からの舶載品が続々とたらされ、ここから当時の都、長安、洛陽に送られてゆく。従って街にはインド人もペルシャ人も群れていた。如宝にとって異国は手の届くところにあった。

いや、如宝自身も俗姓は安氏。ということは漢民族ならぬ安息国系の人間であることをしめしている。安息国というのはカスピ海の東南、バルティヤのことで、古くから中国との交渉が盛んだった。当時の言い方に従えばそこは胡国であり、如宝は胡人ということになる。ちなみに玄宗皇帝と楊貴妃に寵愛されながら後に叛乱を起す安祿山も胡人だが、彼の挙兵は七五五年だから如宝来日以後のことである。

人種の坩堝ともいふべき国際都市で如宝は育った。大唐の繁栄が人と物とを吸いよせ、またゆるやかに吐きだしてゆく。この開かれた古代都市で鑑真もまた戒律を説いていたわけだが、如宝がいつどういう形で師にめぐりあったか、具体的なことはわかっていない。鑑真については、揚

州江陽県に生れ、十四歳のとき仏教信者である父に連れられて仏像を拝したことから仏道に志したといわれているが、如宝にもほぼ同じような事情を想像することが許されるのではないか。

後のことになるが、空海の書いた『招提寺の達嚧文』というのがある。これは如宝について書かれたものらしいのだが、それによると八歳の時に仏門に志したとある。このときから鑑真に侍童として近侍していたとすれば、数回の渡航の失敗とともに経験していることになるが、どうもその気配は薄い。童子として揚州のどこかの寺にいたにせよ、直接弟子入りしたのは、鑑真が五度目の渡航に失敗して揚州に戻ってから、と考えたい。

もちろん、師や高弟たちの口から、これまでの挫折や、困難をきわめた行路について聞かされたことはあったろう。しかし六度師が渡航を決意したとき、如宝は即座に同行を申し出たに違いない。

船を呑みこむほどの怒濤は予想しなかったのか。漂流の恐怖に心をおのかせることはなかったのか……。

全く意に介さなかったといえば嘘にもなろうが、おそらくそれは如宝をたじろがせるほどのものではなかったろう。二十歳前の若さのためばかりではなく、揚州という国際的な風土が、彼の決意を爽やかなものにしたはずだ。大海の潮が環流するように大唐国を中心に人と物とが絶えず動いているこの地にあつて、彼もまたその流れに身をゆだねようと、ごく自然に思い定めたのだ。大海では恐るべき死が口をあけて待ちうけているかもしれないが、げんに各地から、おびたしい船が無事に揚州にやってくるのではないか。近代的ナショナルリズムに無縁だったそのころ、国外

との往来には、今よりもこだわりは少なかったはずだ。

大唐をとりまく大海の波は、また日本の岸をも洗っている。つい先ごろまで海外旅行の機会に恵まれなかったわれわれ日本人は、このへんの感覚が硬直していて、ゆるやかにつながるアジアの歴史全体を見渡す想像力を、どうやら取りもどせずにいるらしい。

そのことに気づけば、視界ははるかにひらけ、安如宝という青年の輪廓も、いまひとつはっきりしてくる。そして如宝自身、日本に着いたとき、この地に数多くの半島系の渡来人や唐人を見出したはずだ。少数ながらインド人も林邑人も、ペルシャ人もいた。このことは、恵雲とともに赴いた東国においても同様で、現在残るコマ、クダラ、ハタなどという言葉に關連する地名がしめすように、渡来系の人々は集団で移り住み、開拓に従事していた。とりわけ白村江で日本が唐、新羅と戦って敗れ、百濟、高句麗が潰滅状態となったときは大量の亡命者が日本に渡って来ており、日本側は彼らを東国に移住させている。これは如宝が東国を訪れる百年ほど前のことで、亡命者の子孫たちはすでに日本化していたとはいえ、秦氏のように、

「俺たちは、秦の始皇帝の子孫だ」

と称し、その血筋を誇るものもいたわけで、東国は如宝にとって、空気の色まで違うほどの異国ではなかった。

しかし、それ以上に、彼の渡海の動機となったのは、鑑真そのひとの存在であろう。師事したのは老師の揚州帰着後とすれば、如宝十六、七歳、側近に侍することを許されて以来、彼の師に対する敬仰は憧れに近いものとなっていたに違いない。

五回目の渡航に失敗して揚州に鑑真が戻ってきたとき、人々は歓呼し、街中に群れて彼を迎えたという。その師を、少年如宝の瞳は吸いよせられるように見つめ続ける。熱狂的な歓迎にも、ほとんど顔色ひとつ変えず、師はふたたび戒律を講じはじめる。あたかも用事のために敷刻席をはずしただけで、また戻ってきて講義の座についた、とでもいうふうに……。竜興寺、崇福寺、大明寺——。師の伝戒、講律は休むひまがない。

すでに鑑真の視力は障害を来している。おそらく、その師の手をひき、杳くうを揃えたのは少年如宝ではなかったか。講義の座につくなり、鑑真は難解な『四分律行事鈔しぶんりつぎょうじしやう』を静かに説く。本を開くまでもなく、大部なこの書物の一字一句はすでに彼の頭の中に刻みこまれているかのようだった。

少年にとっては奇蹟に近い光景である。

——あの大部の書を、和上はすべてそらんじておられるのか。

驚きと憧れの入りまじった思いで近侍するうち、少年は師の心の動きをすばやく直感できるようになった。師が湯を、と命じるより一瞬早く、椀は老師に捧げられ、かすかに肯くか肯かないうちに、師の欲した手巾しゆきんはそっと手渡される。

そういう光景を想像するのは、如宝の兄弟子にあたる法進はつしんが残した『沙弥十戒並威儀經疏しやみじふにぎぎきやうしよ』からである。沙弥の守るべき戒と威儀について書かれた經の注釈書で、これについてはいづれ触れる折もあるが、威儀とは現在の行儀とでもいうような意味で、行住座臥の心得が説かれている。なかでも師に対する奉仕については、食事から排泄の世話まできわめて詳細である。如宝は

来日した時点で安如宝と書かれているから、まだ俗体で沙弥ではないようだが、しかし、侍童として師僧に仕える以上、ひと通りのことは教えられていたに違いない。そして視力の不自由な師によりそい、師の欲するままに用を便じるようになったとき、

「自分は和上の眼だ、そして手だ」

少年の軀は^{からだ}おののきに似たもので満たされたのではなかったか。

一方の鑑真も、他の高弟に対するととはまた別の、あたかも孫とともにいるような心の開き方をしていたのではないか。鑑真の来日に従った法進、思託^{しだく}その他の高弟たちはすでに一流の学侶である。思託のように鑑真が渡航を思い立った時から行をともし、一心同体の歳月を過した人物の師に対する親愛の情は格別ではあったろうが、彼らの中に流れているのは、鑑真の学徳、あるいは志の高さに対する敬慕の念であり、いわば大人が大人に寄せる信頼感だった。

如宝のなつき方はこれとは違う。少年はしなやかな心と軀のすべてで鑑真によりそっている。そして、

「如宝よ」

と呼ぶ鑑真の声音にも、戒律を講じる時とはおのずと違った響きがこめられていたに違いない。その師が改めて日本行きを決意したと知ったとき、如宝は、

——自分も行く。

即座に決意したはずだ。

——和上が日本に行かれるということは、すなわち自分も行くことだ。自分が行かなくていい

たい誰に和上のお世話ができるというのか……。

ついでだが、来日した鑑真の一行の中には、もう一人の優婆塞、潘仙童はんせんどうという名が見える。名前からしても鑑真の侍童の一人と思われるし、如宝より前にその名が書かれているところを見ると先輩格でもあったのだろうか。ただし、仙童の日本に来てからの消息は全く不明のところを見ると早逝したのかもしれない。

彼らを含めて鑑真たちが日本へ向けて出発したのは七五三年十一月、一行は法進、思託らの僧侶十四人、尼三人、そのほか合計二十四人、中には崑崙人こんろん、瞻波人チャンパなどというチベットやインド系の人も混っていた。その後全く史料に登場しない人物もかなりあるが、崑崙人軍法力は長く如宝とともにいたようである。

鑑真渡日の理由——。これはすでに周知のとおりである。日本からの留学僧、栄叡ようがいと普照が、その許を訪れて、法弟の派遣を要請したとき、海路の難を恐れて、誰もはかばかしい返事をしなかったのだ、

「それなら私が行こう、仏法のためなら命を惜しむことはできない」

とみずから渡海を決意した。以来、五度の挫折を経験し、十年の歳月を経た。六度めにやっと日本の土を踏んだとき、鑑真は六十六歳になっていた。ときに十二月二十日、七五三年（天平勝宝五年）のことである。